

近代化研究

「近代化」概念規定の試み

高橋善二郎

Z. Takahashi

The Study of Modernization

— Trial provision of a conception: “Modernization” —

It is very difficult to explain the term “modernization” in one word. The word “modernization” will be historical category. We have many essential words when we explain “modernization” —like “progress”, “democratization”, “rationalization”, “industrialization”. But each words are not enough to explain the real meaning of modernization. The author emphasize to pick up the rationalization. But this rationalization will reject to take some points of view from capitalism and socialism.

目 次

序

- 第一章 「近代化」を「資本主義化」または「資本主義の発展」と規定する見解と私見
 - 第二章 「近代化」を「進歩」と規定する見解と私見（以下次号）
 - 第三章 「近代化」を「民主化」と規定する見解と私見
 - 第四章 「近代化」を「合理化」と規定する見解と私見
 - 第五章 「近代化」を「工業化」と規定する見解と私見
 - 第六章 「近代化」を「産業化」と規定する見解と私見
- 結 語

序

小論は、「近代化概念」の規定を試みるものである。いうまでもなく、この「近代化」という概念は、もともと不確定で、不安定な概念であるばかりではなく、とくに日本では多くの分野で、さまざまな文脈において、さまざまな意味を含めて使われてきた歴史的概念である。「近代化」は、ときには「資本主義化」と同一視され、ときには「民主化」の意味に使われ、ときには「自我の確立」ということが強調された。またあるときには「合理化」、「西洋化」等々の意味に使われてきた。また最近「近代化」が頻繁に用いられるようになった契機には、1960年代後半の日本経済を見舞った技術革新と高度成長とがあったことも事実である。さらにこれに付随して、日本が低開発国に対して果すべき役割と密接な関係がある。同時に、それらの事情に日本の歴史的事情(明治百年)がからみ合い、それとの断絶あるいは接続において戦後の日本を、さらにそれらとの関係において現在の日本の地点そのものを確認することを要請するようになった。こうして「近代化」の問題

は、総括的にとりあげられるべきものとして、すでに潜在的にあったといえよう。

日本の過去一世紀の歴史は、西欧先進諸国を目標として歩んできたものだけに、この歴史的事情は、より基本的なものといえる。そこで、日本の近代化の時期として、過去一世紀を促えることに反論するものはまずいないとしても、ただ問題は、「近代化」の内容とその結果についての認識である。そこからひるがえって、「近代化」の意味と、西欧と日本の近代化の相違、日本とアジア諸国との近代化の相違が問題とされるのである。

「近代化」概念の規定が問われる基本的な理由は、現在ひとびとが「近代化」という言葉にあまりにも捉われすぎているということにある。これは、戦後の日本に著しい風潮として現われたいわゆる「言葉の支配」という社会現象なのである。

The Oxford English Dictionary によると、modernization は、The action or an act of modernizing; the state of being modernized と記されている。そこで modernize をみると、to make or render modern; to give a modern character or appearance to; とある。次に、modern とは、1. Being at this time; now existing. 2. of or pertaining to the present and recent times, as distinguished from the remote past; pertaining to or originating in the current age or period. 3. Characteristic of the present and recent times; new-fashion; not antiquated or obsolete. 4. Every-day, ordinary, commonplace とある。

次に Webster によると Modern とは、次のように記してある。

1. a : of, relation to, or characteristic of a period extending from the more or less remote past to the present time……specif : of or relating to the historical period extending from about A. D. 1500 to the present day—compare ANCIENT, MEDIEVAL. b : of relating to, or characteristic of the present time or the immediate past : CONTEMPORARY, PRESENT DAY. c : suitable to or expressive of the present time 2 : produced by or embodying the most recent techniques, …… 3 : COMMONPLACE, ORDINARY, TRITE……

日本が目標としてきた西欧諸国では modernization という言葉は、この程度に認識されていたもので、modernization そのものが、概念として不明確であり、不安定なものであることがわかる。このように「近代化」についての明確な内容規定のないままに、日本は西欧先進諸国から多くの思想・知識・技術を取り入れてきた。そしていま、われわれは欧米文化の導入の総体を「近代化」と表現しているのである。

Modernization が最近アメリカの歴史学者・社会学者たちによって使われはじめたのは周知のところであるが、特に方法論的にもっとも整備されたかたちで「近代化」という概念を「構成」したのは、J・W・ホール氏である。したがって、日本でこれを「近代化」と訳すと、これまでの日本の慣用的な意味に解釈される危険もある。

そこで私はあらためて「近代化」の概念規定にとりかからなければならない。ところでこの複雑な内容をもつ人間と社会とその歴史の問題が「近代化」という一語によって総括されているので、一義的な規定をのぞむことは不可能なことである。

先にも述べたように「近代化」という概念は歴史的概念として受けとめられている。日本において目標となるのが西欧の近代であるとするならば、「近代化」とは西欧の前近代に対する近代をその内容規定することは当然であろう。事実、近代という言葉は、西欧の近代とくに資本主義あるいは市民社会について用いてきたものであり、それを典型としてきたのである。戦後の日本における明治以来の政治体制や社会体制の廃絶、「自由」な個人を基盤とする政治・社会体制への転化とい

う現象は、しばしば「近代化」という言葉で呼ばれてきた。したがって、日本においては、近代という言葉が、西欧型資本主義社会とか市民社会という現象を意味するという事実が存在していて、「近代化」という言葉がそのような意味を連想させるのである。そこで「近代化」を一つの歴史的な概念として把握しようとするとき、そもそも「近代」とはなにかということが問われることになる。小論が「近代」の検討からはじまるのもそのためである。そして、これまで「近代化」概念の規定にせまるために諸氏の用いてきた諸概念を歴史的視点にたって再検討することが必要なのである。

第一章 「近代化」を「資本主義化」または「資本主義の発展」と規定する見解と私見

「近代化」とは何かということを考察するには、この語の基本になる「近代」という語を検討するのが順序であろう。

この「近代」という概念は、歴史の時代区分の概念として使われているものである。この場合、「近世」という言葉は「近代」と同じ意味だと思う。しかもそれが使われているときには、それはいつも「中世」と「古代」という概念がついになっている。古代・中世・近世という三つの時代概念は、この場合不可分につながっているのである。

この「近代」という概念は、15・16世紀のヨーロッパにおいてできたものであり、しかも、古代と中世という概念といっしょにできているものであって、この三つが次第にできあがっていったものではない。すなわち、ルネッサンス人独特の主観的な時代意識によって、生と死と再生に対応する古代と中世と近代という三つの概念がつくられたものである。

この意味で、この三つの時代概念は、いわば序々に進行するその過程を三つに区切って古代・中世・近代としたものではなく、そのまん中の中世という時代は、漸進的な歴史の進歩における中間の過渡期というよりも、全然存在意義を抹殺された、ただ空白の、いってみれば死の時代にほかならない。そしてそれを間にはさんで、生命が再び生命に直結するということなのである。

「近代」という時代は、このように中世のブランクをとび越して、古代への復帰であると同時に新しい生命の始まりの時期でもあると感じられていた。そのことは、宗教改革についてもいえることである。ルッターやカルビンの教会改革運動は、その理念が、中世時代の墮落したキリスト教を否定して、原始キリスト教に帰ると同時に、新しい時代に応じた新しいキリスト教をつくってゆくという運動であった。徹底した復古思想であると同時に、未来に新しい生命発展をのぞむということが、あたかも中間の時代の抹殺ということをはさんで考えられているのである。これが古代・中世近代という時代の区分をなす主体的な思想根拠である。そこでこのようなルネッサンス以降の「近代」の特質をどのように規定するかが問題になる。

ルネッサンスはギリシャ・ローマの古典文化の復興に伴って新精神を昂揚したのである。ルネッサンスは、日本語で文芸復興と訳したように、多様な内容をもつギリシア・ローマの遺産の中で、特に古典文芸・芸術を復興させたのである。また古典のヒューマニスティックの面を復興させたのである。それは中世のヒューマニズムが自然的人間的なものを抑圧したのに対して、人間解放・自然謳歌において同感したものだといえる。そこで、かりに近代を「人間中心主義」と概括することにする。はたして「近代化」は「人間中心主義」といえるであろうか。

15世紀のイタリア・ルネッサンスが復興させたものは、実は、ギリシア・ローマの古典精神のすべてではなかったのである。いってみれば、古典のパトス的な一面であるにすぎない。それに比べ

て、むしろ近代思想の土台になっているギリシア・ローマの主知主義的・科学的・法的な文化遺産は、そこには全面的に復活されていないのである。それらは、むしろ一時代前の13世紀の、あの中世といわれる時代にアラビア人から輸入してパリに開化した文化運動が、この側面ではなかったか。いってみれば、13世紀ルネッサンスは古典のロゴス的な面の復興であったといえる。そしてそれは15世紀ルネッサンスよりも形式が整い、精神・文化の内容は充実したものであった。近代科学の母胎は、ここにすでにできていたのである。合理主義と科学精神が近代思想の主要素なら、それはこのルネッサンスが昂揚したものである。このロゴス的、すなわち哲学・科学の振興が古典の半面の重要な要素であり、しかもそれが近代思想を形成する母胎をなすとしたら、この13世紀ルネッサンスを無視して近代を論ずることこそ間違いではなからうか。

ともあれ、ルネッサンス・ヒューマニストの主観的根拠によって、生・死・再生の思想が古代・中世・近代という時代概念に固定化されたことは事実である。しかし、それがひとたび固定化され客体化されると一定の社会的体制と照応しなければならない。その場合、一つの類型がよく引き合いに出される。古代が部族制、中世が封建制、近代が資本主義制度である。

たしかに大づかみの三時代の基本体制としては、これはいえないことではない。今この類似にしたがって「近代」の特質を「資本主義」と規定するならば、「近代化」とは「資本主義化」ということになる。「近代化」を「資本主義化」、あるいは「市民社会・資本主義の形成」と規定するひとは多い。日本でも小松茂夫氏は、その典型的なひとといえよう。氏はマルクスの「ブルジョアジーは……あらゆる国民、もっとも未開な国民までも文明にひきいれる。……ブルジョアジーは自分の姿に似せて世界を作る」の著名な文句をその基底として、次のように述べている。「『近代化』とは資本制原理の世界形成の運動である。資本制原理が既存のあらゆる社会構成原理を否定し、既存のあらゆる社会を原理適合的な社会につくりかえる運動である。資本制原理が世界形成者としての自己の実力と威厳を既存の全社会にたいして示現する運動である。一口でいえば、既存社会にたいして資本制原理がとるところの否定の姿勢と行動、それが『近代化』である。」¹⁾

井上清氏も次のように言明している。「要するに、私は『近代化』とは、一言でいえば資本主義化であると規定する。それをもうすこしくわしくいえば、理想的な近代化とは、つぎの四条件をみたすものであると考える。(1)封建的生産様式を一掃して資本主義的生産様式を發展させ、(2)他国民族の支配から完全に独立し、国民主権（現実にはブルジョアジーの支配）のもとに、民主主義により、その社会の全住民を政治的に統一し、中央集権の能率的な統治機構をつくりあげ、(3)家父長制・身分制とそのイデオロギーから各人を解放して、法の前における万人の平等同権と個人の自主自由を、法的にも思想的にも確立し、(4)かかる経済・政治・社会体制の知的文化的支柱として、国民教育を普及させ、科学技術を發達させる、……。」²⁾

林健太郎氏も次のように見解を述べている。「明治以後の日本の『西洋化』といわれるものは、決して日本が『西洋』という歴史体に合体したことでなく、ただ文明の世界過程に参加し、この世界的な水準に接近して行ったというだけのことである。そしてこの文明の過程には退歩は存しないから、日本の文明過程もまた進歩のみの過程である。たとえば日本の『文明化』は論理的には『西洋化』ではないが、それは現象的には西洋化として現われ、それは『近代化』という曖昧な言葉によって表現されることになる。一般的に言って、社会構成が超地域的な普遍性を持つのは資本主義社会、しかも文明が機械文明の段階に達した以後のその特徴なのであって、それは到る所で基本的には同一の社会構成をつくり出し、またその触れるところではそれ以前の社会を解体させて自己の組織の中に組み入れた。（その意味でこの資本主義の時期を普遍的に『近代』と称するの

は妥当である。『近代的』『近代化』という言葉は必ずしも経済的な『資本主義的』の意味ばかりではないが、またそのような意味に使うことは差支ない。」³⁾

中村吉三郎氏も、「そもそも近代化とは、ただ歴史的に『新しい時代』にはいったというだけのことではない。すでに『近代』ということばには、固有の意味が課せられている。近代社会といわれるからには、それ相応の固有の社会構成をもったものでなければならない。すなわち、市民階級が支配的権力を掌握する社会であり、一応その完成された形においては、資本がその社会構成を規定する社会といえよう。この意味からは、近代化とは資本主義化ということもできよう。」⁴⁾と述べている。

津田秀夫氏も、「近代化」を経済史の問題として限定するならば、それは資本主義化ということと同義語となることを認めている⁵⁾。

われわれが「近代」とか「近代化」とかを問題にすると、ヨーロッパの歴史上の「近代」や西ヨーロッパ社会における本来の意味での「近代化」を考えないわけにはゆかない。すなわち、「近代化」とは、西ヨーロッパにとっては封建的社会体制の崩壊と資本主義ないし市民社会体制の発展を意味したわけである。この社会構造の変化の現象を「近代」の特徴とみて、その過程を「近代化」として捉えるわけである。

中村勝己氏は西ヨーロッパにおける本来の意味での「近代化」を、次のように説明している。「ここで資本主義というのは、もちろん『営利』一般すなわち『利益のためには地獄へも船を乗り入れて、帆の焼け焦げるのもかまわなかった』かのオランダの船長のような営利、『コンメンダ・租税請負・国家への貸付・戦争・宮廷・官僚への金融』など、およそ利用しうる機会を倫理の限界をもともせず追求する冒険、ありとあらゆる『欺瞞と商略』によって利益を追求する経済組織ではなく、勤労民衆の営々たる労働を根底として、市場における等価交換によって利潤を得るような経済組織をさしている。もう少し立ち入っていると、王侯・貴族・廷臣・特権商人およびこれらに寄生する人々ではなくて、自己の生産活動に天職 *Beruf* を見いだすような人々＝『産業的中産層』または『中産的生産者層』が広範に成立（いわゆる『民富』の形成）し、さらにそれが両極分解して資本＝賃労働関係が成立した結果、自己の労働力を自由な商品として売却せざるをえず、また生産手段をもたないという意味で『二重の意味での自由』な賃労働者と、その労働力を購入して市場における交換を通じて産業利潤を実現する資本家とが現われ、この二大階級は法律的には平等な市民として、しかし経済的にはいちじるしく不平等な階級として労働力の売買契約を結んだ。この二大階級が地主の中の近代的部分をしがえつつ一つの社会の再生産の骨格となるような社会（＝いわゆる『三分制』）、それをわれわれは資本主義社会または市民社会と呼び、そういう社会への移行を『近代化』と呼んでいるわけである。」⁶⁾

以上が西欧近代に特有な現象といえよう。しかしこの現象をその他の地域に見出すことには疑問がある。とくに後進国の資本主義化にあたっては、旧体制の支配者が、多くの場合資本家に転化していったわけである。そこで中村氏の述べたような西欧において進行した社会変化に類似した現象をこの地域に見出し、これを対照しようとする、と「近代化」の意味は、きわめて類推的なものになってしまう。「近代」という概念が実体概念として定着しにくい理由がここにあるわけである。そこで、とかくあいまいなままに「近代化」を封建的社会関係の否定、封建的な生産関係の排除、封建的な専制政治からの解放・家父長制家族制度からの脱却などとして、近代化を反封建制、反封建遺制と規定することが多い。しかし、それだけでは「反近代性」が内容として示されるにすぎないのである。

ところで、この「近代化」＝「資本主義化」の概念の適用には、次のような問題がある。すなわち、現在、全世界のきわめて多くの部分が、その主な特徴として、社会主義体制に向いつつあるということは、一つの事実である。そこで、そう遠くない将来において、その社会主義体制が全世界に波及して、世界史を動かす主動力になった場合を想定してみよう。すると、その時代を何と呼ぶべきか。もし資本主義と社会主義を同質的な体制と解すれば、「近代」概念を社会主義時代の上にも使うことができる。しかし、それは社会科学上の真理に矛盾することになる。そこで、社会科学上の真理に従って資本主義と社会主義を異質的な体制とすれば、社会主義時代を「近代」と呼ぶことは時代概念において矛盾してしまう。なぜなら、「近代」の理念は本来「反中世」という意味をもって成立しているのである。資本主義の反封建制ということは正しいが、社会主義の反封建制ということは意味をなさない。資本主義は封建制を克服したが、社会主義はさらにその資本主義を克服したのだから、資本主義時代を近代と呼ぶなら、それとは本質の異なる社会主義時代は別の概念で呼ばなければならない。それでは、この先に何か新しい時代を一つつけたらどうか。「現代」という概念はどうか。しかし、それはどの時代にもあるもので、また刻々と動いてしまうものであるから、一定の時代を客観的に指表する概念にはなりえない。かりにそれを何と呼んでみても、古代・中世・近代の先につけたのでは、時代が四つになり、本来「中世」のもっている生と生の「間」としての意味がなくなってしまう。

このように「近代化」を「資本主義化」と規定すると、これまでの「近代」の概念がくずれてしまうことになる。くずれるばかりか「近代」が不可分の関係にある「古代」・「中世」の概念も一緒にくずれてしまう。要するに時代概念は、そこで根底から新たに作り直さなければならなくなるのである。

現在、社会主義体制の内部においても、「近代化」といわれるものが、大きな問題として日程に上ってきている。低開発諸国においても同じ問題がある。この場合、「近代化」は資本主義と社会主義の二者択一の問題、あるいはその折衷の問題に当面している。「近代化」を封建体制から資本主義体制への歴史的転換の過程としてのみみるのは、一見して明らかなように、世界史の現段階の把握と相いれないのである。

井上清氏は、こうした問題について、次のような説をとるのである、すなわち、「歴史的範疇としての『近代化』がどのように定義されるとしても、それは必ず資本主義の形成・発展と結びつけられていなければならない。工業化には資本主義的工業化もあれば、社会主義的工業化もある。民主主義にはブルジョア民主主義もあればプロレタリア民主主義もある。両者には決定的なちがいがあるので、そのちがいを無視して、工業化一般や民主主義一般を想定して、これを『近代化』とすることは、歴史と現実の理解および評価に、重大なあやまりと混乱をもちこむことになる。」「社会主義の道に沿う経済文化建設も、工業化や科学技術の体系的適用という意味でなら、『近代化』であるが、歴史的範疇としては、それを『近代化』とはいわないで、社会主義建設とか工業化とかいうほうがよい。」¹⁾ 井上氏のように、プロレタリア民主主義を認めることには賛成できない。また社会主義的近代化のことを問題としないことにも疑問がある。われわれは現在、資本主義的近代化と社会主義的近代化について、語りうるはずである。

- 1) 小松茂夫「近代日本における『伝統』主義」(「近代日本思想史講座」第7巻 昭和34年11月) 132頁～133頁。
- 2) 井上清「日本の『近代化』と軍国主義」(新日本新書, 新日本出版社, 昭和41年8月) 14頁～15頁。
- 3) 林健太郎「西欧と日本」(新潮社, 日本文化研究2, 昭和34年) 25頁, 26頁, 29頁。

- 4) 中村吉三郎「日本の近代化についての一管見」(『社会科学討究』第8巻, 昭和37年12月) 175頁。
- 5) 津田秀夫「明治国家成立の歴史的前提」(稲田正次編「明治国家形成過程の研究」1966年3月, 御茶の水書房) 223頁。
- 6) 中村勝己「日本の『近代化』」(『経済評論』昭和41年6月号) 23頁。
- 7) 井上清「『近代化』への一つのアプローチ」(『思想』1963年11月号 473号) 12頁, 16頁。

参考文献：大島康正著「時代区分の成立根拠」筑摩書房, 昭和24年。歴史学研究会編「時代区分上の理論的諸問題」岩波書店, 昭和31年。

アーノルド・J・トインビーは、近代的という語のもつ意味を、次のように述べている。「現代では、世界のあらゆる国が近代的たらんと努力している。しかし『近代的』という気持のよい言葉は婉曲的な表現なのである。あまり気持がよくない『西洋的』という言葉の代用品なのである。ある場合においては、人は異国の生活様式をとりいれようと欲するであろう。欲しないまでも、そうせざるを得ない立場に陥ったと考えるだろう。しかし現情勢下において、自国の先祖伝来の生活様式が不相当であると自認することは不愉快にちがいない。そこで『近代的』という言葉を使えば顔が立つわけだ。そういうわけで、この言葉が神聖な言葉になった。その上に、それはもう二つの神聖な言葉をもたらした。『科学』と『民主主義』である。現代においては、世界のあらゆる国、あらゆる人間が、ことごとく『近代的』であり、『科学的』であり、『民主主義的』であると主張せざるを得ない状況に陥っているのだ。この三つの神聖な言葉の全部を否定することはもちろん、そのうちのただ一つでも否定することは、自らを故意に文明の境界外におき、暗闇のうちに生きることを選ぶにひとしいのだ。」¹⁾

矢内原忠雄氏も次のように述べている。「日本近代化の問題は、欧米の制度と技術と文化を日本に輸入し、これを消化することにある。簡単に言えば、日本の社会および文化の西洋化である。…しかし日本の社会が全く西洋化してしまうことは、また世界の益でもない。世界の文化は諸民族文化の特徴ある差異あることによって、豊富にせられるのである。」²⁾

すなわち、近代化は西欧化と同義であるとする考え方は、これまでおこなわれてきた。また矢内原氏のごとく、日本人には近代化の規定への探究を、西欧文明の本質の発見という課題に向ける傾向があった。本来、近代化の概念が、西欧近代を指標としてうまれたものであったことは否定できない。そして、この近代化という言葉の内容は、さまざまな意味に理解されるにせよ、江口朴郎氏のいうように、「常識的に、経済・技術面での『産業革命』政治面での『市民革命』、そして文化面でのそれらの変革を推進した西欧の近代思想の提起している問題」³⁾を対象としてきたといつてよいであろう。その点われわれは、近代化の諸変動にあたって西欧諸国家が先頭をきったこと、やや遅れて他のもろもの社会が、その直接間接の衝撃を感じたことを認めないわけにはゆかない。

たしかに「西欧化」という言葉が用いられる場合には、それがひろい意味を含んでいることは明らかである。西欧社会ないし西欧文化は、専制的ないし封建的東洋社会に対立する意味での近代的市民的西欧社会という意味を含んでいる。それはまた、宗教改革以後の近代キリスト教社会の連想をも伴っている。つまり、西欧の近代社会は、ローマ・カトリックの神学と教会が絶対の支配力を揮っていた中世の社会に対比しての、個人意識の自覚と新教倫理の確立を伴った啓蒙(ルネッサンス=宗教改革)期以後の社会と考えられるのである。マックス・ウェーバーが「西欧的」と呼んだ社会は、まさにそのように考えられた社会であった。歴史的现象として、近代化が西欧社会から始まったために、われわれが近代化は西欧化と解釈するのは当然であろう。まして西欧において16世紀から19世紀に至る文明のあらゆる部門における発展は、それを「進歩」と自認した西欧人に限り

ない自信をあたえたのである。とくに自然科学の進歩による技術の急速な発展は、西欧人の生活と軍事力を驚くべきほど変化発展せしめたのである。中世にはじまった他の大陸への探検は、やがて植民地の獲得に移り、西欧の富は史上空前のものとなった。その結果、西欧人がこれまでの西欧的な考え方や価値観、また、それに基づく諸制度や科学技術を、その他の地域に受容させることが、その地域を「近代化」させることであると考えていたのは当然と思われる。それは西欧的価値観に対する西欧人の絶対的信頼があって、はじめて可能なことであった。

この西欧における繁栄と、西欧人の自信の根底をなすものとして、近代合理主義を指摘する必要がある。これこそ近代西欧文化の骨格をなすものであった。近代科学は計量的な観察と実験とによる帰納法によって基礎づけられ、現象を理性によって明確に分析し、その本質を抽象把握する客観的精神に貫かれていた。これによって科学は長足の発展をとげたのである。合理主義は、同様にして人間社会に向けられた。ここでは個人を発見することにより、人間尊重の精神がめざめた。個人主義とヒューマンイズムとが生まれた。自由と平等とは新しい社会の理想となり、社会革命の自覚も生じ、市民社会の形成がはじまった。合理主義を中枢とする近代ヨーロッパにおける以上の事象は、それを中世社会と比較対象した場合、ここに飛躍的進歩による中世との隔絶が実感をもって西欧人に感ぜられた。この時期に、歴史における「進歩の観念」が成立したのも理解できるところである。

このような西欧における近代過程の要素を指摘して、「近代化」とは「進歩」のことである、とする見解がある。また、自由な個人を基本とする社会体制をとりあげて、「市民社会」の指標を「民主主義」におき、「民主化」をもって「近代化」と規定する見解もある。さらに「近代化」とは「合理化」のことである、とする見解もある。そこで次号において、それらの見解について検討してみることにする。

- 1) 黒沢英二訳「文明の実験」(毎日新聞社、昭和42年9月)40頁、41頁。
- 2) 矢内原忠雄「現代日本小史」(2巻、東京、1952年)上巻、9～10頁。
- 3) 江口朴郎「世界史における“近代化”の問題点」上、(「思想」1963年11月号)76頁。